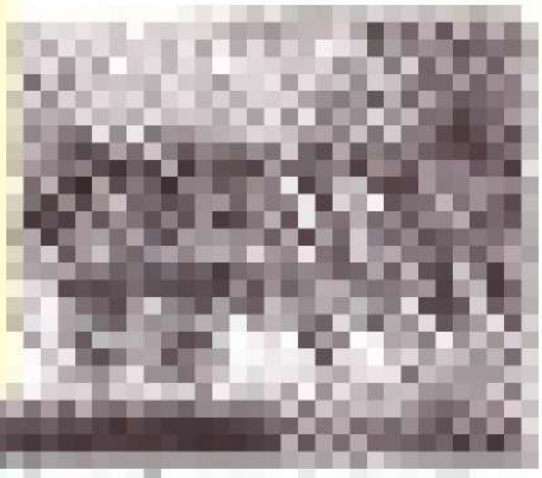
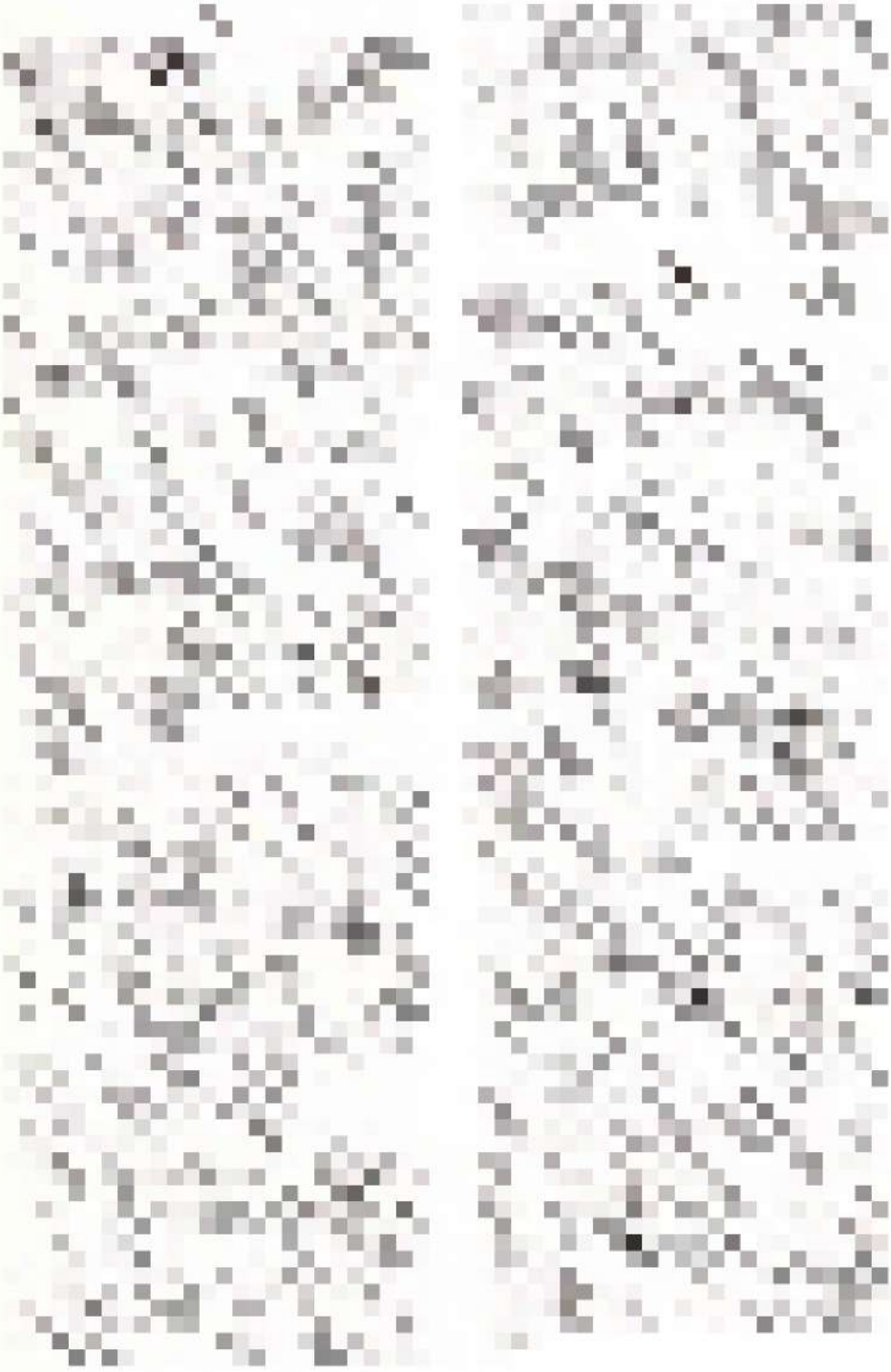




Opera コジェナーが魅せた リーダー・アーベント

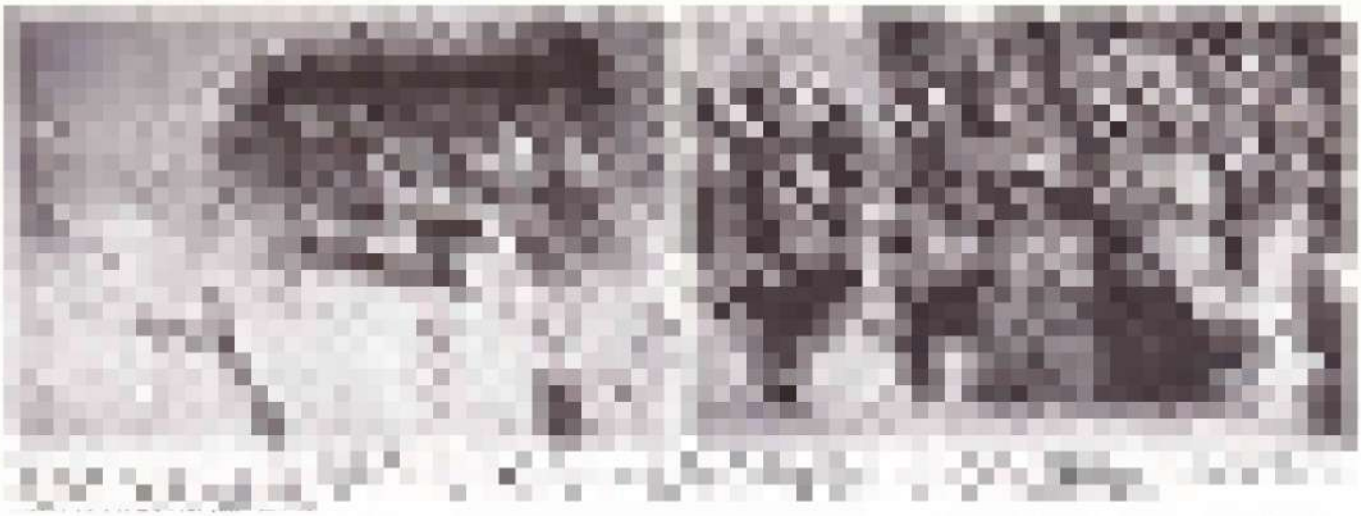
チューリヒ音楽祭たけなわの6月21日、チューリヒ歌劇場ではマグダレーナ・コジェナーのリーダー・アーベントが行われた。彼女はチューリヒではあまり歌っていないからだろうか、サッカーのワールドカップでスイスが負けた直後だったからだろうか、空席が目立ったが、真紅のドレスに身を包んだコジェナーは颯爽と登場した。「血の赤色ドレス」、「9段のフリル」という描写が、2008年ミラノスカラ座での衣装と同じ物かと思わせる。

前半はドヴォルザークの《聖書の歌》で、母国語のチェコ語と、心地よいメゾの音域を生かして、温かく響いたが、ともすると単調にも感じられる10曲だった。だが、マルコルム・マルティノーのピアノは、そこを補うように雄弁で、細やかに語りかけてくる。コジェナーの歌は雄大に流れるスラブの川を、マルティノーのピアノはその川岸に当たる水しぶきや、小鳥のさえずりを彷彿とさせ、従来の歌唱と伴奏の概念を覆すデュオだった。特に6曲目の〈聞きたまえ、主よ、我が叫びを〉は、コジェナーのピアニッシモも説得力があり、秀逸だった。

約30分の前半は短かすぎる気がしたが、休憩後はまったく別のコジェナーがいた。ムソルグスキーの《子供部屋》は、物語を読んでもらっているようなワクワクする気持ちを与えてくれた。そしてラヴェルの《博物誌》では活き活きと歌い演じるコジェナーがいた。

アンコールはシューマンの〈くるみの木〉と〈インテルメッツォ（間奏曲）〉の間にフォーレの〈愛の夢〉をはさんで3曲歌ったが、輝かしいシューマンの歌曲がし

Scramble Shot



っくりきた。ぜひ一度、ラトルのミューズと言われる彼女の、オール・シューマンの夕べを聴いてみたい。　（中 東生）